

追悼文

坂巻哲也

京都大学

「食べ物だけはけちるな。」これは私が西田さんのもとでチンパンジー調査を始めたころに学んだ一つの教訓である。このことを西田さんが直接私に話されたのか、西田さんと一緒に過ごしている中で私が勝手にそう学びとったのか、よく覚えていない。しかし、どちらであれ、私はその後自らのフィールドを新しい地域へ広げていくにつれ、この教訓の重要性はますます増しつつあるように思う。フィールドで手に入れることができるご馳走、あるいはご馳走を手に入れようとする努力が、どんなに測り知れない喜びを私たちに与えてくれることか。そのことを西田さんは教えられたのだと思う。



西田さんを偲ぶ

松阪崇久

関西大学

癌であることを告げられたのは5年ほど前のことだったか。その時にも大変ショックを受けたのであったが、その後も勢いの衰えることなく研究に邁進される西田さんの姿には圧倒され続けた。休むことなく第一線で論文や著書を執筆され、マハレでの現地調査も続けられ、最後の最後まで現役の研究者として研究の道をひた走られた。そのような姿を見ていて、西田さんはこの勢いで病気にも打ち勝たれるのではないかなと思うようになっていたくらいだった。

学部生の時に受けた西田さんの「人類学」の講義は、大学で受けた中で僕が一番おもしろいと感じたものであった。西田さんの話はときどき大きく「脱線」をしたが、それがまたいつも興味深い内容だった。大学院に進学後は、何から何までお世話になった。調査隊の一員としてマハレに連れて行っていただき、学位論文のご指導もいただいた。大学院修了後には、(財)日本モンキーセンターでの研究員の職もご紹介いただいた。また、チンパンジーの文化的行動について共同研究をさせてもらったことや、

映像エソグラムの作成で協力させてもらったことを大変光栄なことと思っている。

西田さんとはマハレでも何度か一緒に過ごしてもらった。森と一緒に歩いたこともある。初めてのマハレ滞在の時には、チンパンジーの行動をビデオで記録する西田さんの後を追いつつ、チンパンジーのことや観察の仕方を学んだ。カンシアナ・キャンプでその日に観察したことを話す時間はとても楽しいものだった。僕が観察したことを話すと、西田さんはいつも熱心に聞いてくださった。西田さんの豊富な観察経験から、類似の観察事例について教えてくださることもあった。「それは是非論文にすべきだ」と背中を押していただいたこともある。カンシアナでの夕食も忘れられない思い出である。タンガニイカ湖で捕れた「クーヘ」の刺身・りゅうきゅうや、すき焼き。西田さんは、ビールを少しでも冷やすために瓶に濡れたタオルを巻いて置いておくのを忘れなかった。魚のさばき方も西田さんから教わった。そのおかげで、マハレで寿司を楽しむこともできるようになった。食事の席では西田さんはいつもジョークを言って場を楽しい雰囲気にしてくださった。西田さんの笑顔が懐かしく、そして寂しく思い出される。

お葬式のお別れの際には、お花を西田さんの足元に入れさせてもらった。この足で森や山を歩き回り、数多くの貴重な発見を積み重ねてこられたのだということを想いながら。そして、きっとまたマハレの森を歩かれるのではないかと想像した。ひょっとすると今ごろ、トングウェの古い友人たちや、ントロギ、カメマンフ、チャウシク、マスディといったチンパンジーたちとの再会を楽しんでおられるかもしれないと思う。

追悼文

井上英治

京都大学

京都大学の学部生の頃、西田さんの人類学の授業を受講しました。授業で何度かマハレのチンパンジーの映像を見せて下さり、とても楽しそうにチンパンジーの話をしていただいていたのを覚えています。初めてお話したのは卒業研究の相談に伺ったときで、授業を受けていた私のことを覚えていて下さったことに驚きました。私が卒業研究でニホンザルを対象にDNAによる父子判定を行いたいと話すと、当時研究室ではDNAの実験ができる環境になかったため、霊長類の父子判定研究のパイオニアの1人である故竹中修教授(霊長類研究所)を紹介して下さいました。彼らのおかげで、私は現在行動データとDNAデータをもとに野生動物の研究を行なっています。

ニホンザルの父子判定の研究を終えた後、西田さんがマハレでのチンパンジーの研究に誘って下さいました。私はとくにアフリカでの研究に対する強い憧れはありませんでしたが、マハレで研究を行なうことを決めました。西田さんの誘いがなかったら、私がアフリカで研究することはなかったと思います。また、私が初めてマハレのチンパンジーを見た際も、西田さんと一緒にいました。西田さんは